

本会元理事長 岸俊男博士訃



本会元理事長、岸俊男博士は、かねて療養中のところ、昭和六十二年一月二十一日午前九時二十二分、奈良県橿原市所在の同県立医科大学附属病院にて膵臓癌のため急逝された。享年六十六歳。ここに謹んで哀悼の意を捧げるものである。

博士は大正九年九月十五日、京都市上京区にお生まれになり、ほどなく東大寺に隣接する奈良市押上町の地に移転、奈良県技師であった御尊父岸熊吉氏の感化もあり、幼少のころから日本古代史、とりわけその主舞台となった大和の地の歴史と古文化に深く親しみつつ成長された。その後、第三高等学校を経て京都帝国大学文学部史学科に入学、学業への専念が許されない時局下、昭和

十九年九月をもって卒業され、海軍勤務を経て昭和二十年十月同大学院に入学、戦後改めて本格的な学究生活に入られることとなった。

翌昭和二十一年九月には京都帝国大学文学部助手に任せられ、以後新制大学への移行を経て、同二十六年十月奈良女子大学文学部講師に転出、同助教授を経て昭和三十年四月に京都大学助教授（分校）に転任された。さらに昭和三十三年三月には文学部に移られ、同四十四年十月教授に昇任、国史学第一講座を担当された。博士はまた御研究や学生に対する教育指導のかたわら、京都大学評議員、文学部附属博物館の理事等を併任され、さらには国の文化財保護審議会専門委員、歴史的風土審議会委員、国立歴史民俗博物館運営協議員、同評議員を務めるなど、広く文化財保護の面においても活躍された。そのほか木簡学会会長を始め、諸学会の役職も歴任されたが、とりわけ本会への功績は大きく、昭和三十四年四月以降永く評議員・理事を務められ、特に同五十七年六月より五十九年五月までは理事長として、会の運営と本誌の発展のために尽力されたのである。

博士は、日本古代史学の分野において、戦後一貫して学界における指導的役割を果たしてこられたが、その研究の特色は徹底した資料の収集・分析とその総合にあり、何物にもとらわれない清新にして自由な発想と精細・緻密な論証とを兼ね備えたその学風は、全く余人の追隨を許さぬものといつてよい。その初期の成果をまとめた主要著書である『日本古代政治史研究』『日本古代籍

帳の研究』の兩冊は、いずれも日本古代の研究に不動の定点を築いたものとして評価は高く、そこに示された前人未発の業績は、今後の研究に多方面にわたる豊かな可能性を切り拓くものとして、研究者必読の書となっている。

すなわち学位論文である前書に収められた諸論考のうち「ワニ氏に関する基礎的考察」「紀氏に関する一試考」では、古代豪族の個別研究を通じて、不明な点の多い七世紀以前の大和国家の歴史に新たな視点からする解明の光があてられた。特に後者において検証された外征軍（水軍）の問題は、同じく「防人考」によって明らかにされた国造軍の存在とともに、古代軍制の重要問題を提起したのとして意義深い。また「元明太上天皇の崩御」「光明立后の史的意義」「越前国東大寺領庄園をめぐる政治的動向」その他の諸論考は、従来ともすれば主観的憶測に流れがちであった奈良朝政治史を厳密な実証的基礎の上に据え直し、多くの史実の発掘を通じて今日の定説を形作ったものである。そこではまた律令制下の皇権の所在、古代の皇后の史的性格、奈良朝政治史における藤原仲麻呂の足跡など、外くの重要な問題が解明された。一方、後書は正倉院文書中の戸籍や計帳、および班田図などの基礎的研究を進め、その成果の上に立って古代の戸籍制度や村落制度、さらには土地制度や口分田耕営の実態など、律令國家の公民支配の具体相およびその沿革を究明したものである。ここでもその学風の特徴は遺憾なく發揮され、厳しい実証の精神に裏打された独創的な着眼により、今日この分野の研究の基礎をなす重要な事実

のほとんどはこの書によって闡明せられたといつて過言でない。

その後博士は、日本古代史学の新史料としての木簡やその他の出土文字資料、さらには古代宮都やそれを規制した古道の研究に取り組み、考古学の発掘成果や歴史地理学的手法との総合の上、新たな研究領域と方法を積極的に開拓し、今日までその分野における第一人者として、国内ばかりでなく広く国際的にも活躍してこられた。その成果を大成すべく、多忙の合間を縫って心を砕いておられた矢先に病魔に襲われ、遂に帰らぬ人となられたことは惜しみても余りあることであった。

博士は昭和五十九年四月退官にあたって京都大学名誉教授の称号を授与され、同時に愛知学院大学教授、奈良県立橿原考古学研究所所長に迎えられ、増々御研究と後進の指導に意欲を燃やしておられたが、あまりにも早過ぎるこのたびの御逝去であった。葬儀は一月二十三日、奈良市にある岸家ゆかりの浄光寺でしめやかに行われた。法名は顯淨院釋誠俊。喪主は長男俊和氏。式には現理事長越智武臣博士をはじめ、各地より多くの知人・門下生らが参集して博士との永別を惜しんだ。

（鎌田元一記）